

農学生命科学研究科全体の取組について

中西 友子

東京大学大学院農学生命科学研究科 放射性同位元素施設・教授

福島第一原子力発電所の事故直後から、3-4ヶ月ごとに開催して参りました農学生命科学研究科での被災地支援研究は、今回で8回目となります。今までの報告会から(<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/rpjt/index.html>)作物、土壌、森林、動物、魚、サイエンスコミュニケーションなど、非常に広い分野での研究が進んで参りました。そこで、今回、これら、農学部の教員40-50人ほどが行ってきた研究成果を、NHKブックスから、「土壌汚染」というタイトルで出版することができましたので、ご報告いたします。先回お知らせしましたSpringer社の英語版は、昨年10月の時点で集まった成果を集めたものですが、今回の文庫本は今年の夏までに判ってきたことを纏めたものです。

事故から2年9カ月が経ち、この間の環境中の放射性セシウムの動きが少しずつ明らかになって参りました。特に、ほとんど動かなくなってきた森林中の放射性セシウムですが、これからあまり動かないのでしょうか。また河川、沼や池で測定される放射線量は、これからどのように変化していくのでしょうか。放射性セシウム137の半減期が30年であることを考えると、私たちはこれからも継続して放射線の動きを調べていこうと思っています。

今年から、今まで私共が得て参りました成果をもとに、学生や大学院生を対象にした放射線教育も始まりました(<http://www.agc.a.u-tokyo.ac.jp/fg6/top.html>)。この教育の特徴は、講義だけでなく、附属牧場をはじめ野外での実習も合わせて行っていることです。農学を深めるためには現場の科学を知ることが欠かせないからです。そしてこれらの教育資料は、調査研究資料と共に、出版できる形にしていきたいと考えています。これらの活動を通して、今まであまり行われてこなかった、農学の視点からの放射線教育をさらに充実させていきたいと考えているところです。また、私共一同、これから得られる新しい知見につきましても、さらに継続して国内外へ発信していきたいと考えております。

